




学位論文審査の結果の要旨

令和 3 年 11 月 10 日

審査委員	主査	木下 陽之 		
	副主査	中村 祐 		
	副主査	舛形 尚 		
願出者	専攻	医学	部門	(平成27年度以前入学者のみ記入)
	学籍番号	16D733	氏名	村上 治
論文題目	Relationship between Willingness and Psychological Characteristics of Suicide Prevention Telephone Counselors: A Retrospective Observational Study.			
学位論文の審査結果	<input checked="" type="radio"/> 合格 ・ <input type="radio"/> 不合格 (該当するものを○で囲むこと。)			

〔要旨〕

背景と目的

自殺は世界的な公衆衛生上の問題である。自殺予防の一方策として電話相談があり、日本においては、日本ののちの電話連盟に所属するボランティア相談員が役割を担っている。しかし、電話相談員の人数が不足しているため、相談のニーズを十分に満たすことができていない。電話相談員を確保するためには、活動に対する意欲が重要となるが、電話相談員の活動意欲に関する研究は少ない。そこで本研究では、電話相談員の活動意欲を構成する要因を探索し、それら要因間の関連性を明らかにすることを目的とした。

方法

日本ののちの電話連盟10センターの電話相談員を対象に、郵送による質問紙調査を行った。評価項目は、基本属性、活動状況、心理的特性、ソーシャルサポート及び健康関連QOLとした。心理的特性の測定にはGrit-S (やり抜く力)とGSES (一般性自己効力感)を用いた。また、ソーシャルサポートの測定にはMSPSSを、健康関連QOLの測定にはSF-8(身体的・精神的健康度)を用いた。

まず記述統計により基本属性を分析した。次に、探索的因子分析を行い、質問項目「電話相談活動に関して日頃思っていること」における共通因子を抽出した。さらに、構造方程式モデリングを用いて、活動意欲と心理的特性、ソーシャルサポート、健康関連QOL及び抽出因子との関連性について分析を行った。最後に、深夜帯の担当状況(現在担当・過去に担当・担当経験なし)における各因子を比較するため、一元配置分散分析(Welch 法)を行った。

統計解析にはJMP Pro 15 (SAS Institute Inc.)及びSPSS Statistics 25 (IBM)を使用した。

結果

有効回答数は709件(回収率50.4%)であり、男性138名(19.5%)、女性569名(80.3%)であった(2名は性別不明)。年齢層は男女ともに60代が最も多かった。次に、回答から『活動意欲』、『活動への負担感』及び『対処の困難感』の3因子が抽出された。また、活動意欲に対して、ソーシャルサポ

ート(標準偏回帰係数 $\beta=0.21$, $p<0.001$)とやり抜く力 ($\beta=0.18$, $p<0.001$)が直接的に関連し、健康関連QOL及び一般性自己効力感が間接的に関連していた。本モデルでは各因子が活動意欲の22%を説明した ($R^2=0.22$, $p<0.001$)。深夜帯の担当状況別の比較においては、現在担当している群は、他の群に比べ身体的健康度が高く ($p<0.05$)、対処の困難感が低い ($p<0.005$) 傾向がみられた。

考察

今回の研究結果から、電話相談活動への意欲を高めるためには、ソーシャルサポート、やり抜く力、健康関連QOL及び一般性自己効力感を高めることが有効であることが推察される。そのため、電話相談員に対する組織としてのソーシャルサポートの充実及び具体的な戦略を持った研修体制の構築が必要であろう。

本研究の限界は、横断的研究であるため、因果関係について断定できないこと、回収率が低いこと、結果に偏りが生じた可能性があること、組織に関する質問項目が無かったことである。

結論

ソーシャルサポートとやり抜く力は、電話相談活動意欲に対し直接的な影響を与え、一般性自己効力感及び健康関連QOLは間接的な影響を与えていた。今回得られた知見は、電話相談員の活動意欲を高めるための具体的な方策を検討する上で有用であると考えられる。

本研究に関する学位論文審査委員会は令和3年11月10日に行われ、以下に示すような様々な質疑応答が行われたが、それに対し適切な回答が得られた。

1. 全国にアンケート調査をする時の手続きについて。
2. ソーシャルサポートは、組織からのサポートについても含まれているのか。
3. グリットについて、研究結果を受けて今後の対応や対策はどのように考えているか。
4. 活動の長さ（経験期間）と活動意欲との関連性はどうかであったか。
5. 今後実証・検証をして、もう一度調査することは可能であるか。
6. ソーシャルサポートと自己効力感とで、どちらが重要因子となっているか。
7. 電話相談の中において、ソーシャルサポートで何が欠けていると考えるか。
8. 経験年数は9年以下が比較的多いが、そのことが年齢構成を反映しているか。
9. ソーシャルサポートとやり抜く力の関与が説明変数として22%であったが、その結果についての印象はどうか。
10. 電話相談員の家族などに向けたサポートの関与についてはどのように考えるか。

本論文は、自殺予防を目的とした電話相談員の活動意欲に関する研究であり、活動意欲に影響を与える潜在的な要因を探索的に見出し、他の観測された要因と共に、それら要因がどのように相互に関連しているかを明らかにした点で学術的価値が高い。また、このような研究は他にはほとんど見られず、新規性の面も含めて意義が認められ、本審査委員会では審査員全員一致で博士（医学）論文に相応しいものと判断し、合格とした。

掲載誌名	International Journal of Environmental Research and Public Health 第18巻, 第18号		
(公表予定) 掲載年月	2021年9月	出版社(等)名	MDPI (Multidisciplinary Digital Publishing Institute)

(備考) 要旨は、1,500字以内にまとめてください。